夏期シンポジウム基調講演録（Ｈ２２．８．７）

「高大接続テスト(仮称)と教育改革」

北海道大学公共政策大学院特任教授　佐々木　隆生

高大接続が機能不全となっている原因は、ＡＯ入試や推薦入試といった非学力選抜が我国の大学入学者選抜の５割強を占めるようになってきている現状に求められます。特に私立大学ではその傾向が顕著であるということです。そのため、無理に非学力選抜を実施しなければならないほど大学をたくさん作り過ぎたのではないかという声が聞こえてくるようになりました。しかしこの議論は根本から間違っている。知識基盤社会という今日の現状を見ると我国の大学進学率は決して高くはないのです。資料は２００７年なのでやや古いが、オーストラリアやニュージーランドは８５％、台湾や韓国は８０％を越えている。西ヨーロッパのノルウェー・フィンランド・スウェーデン・アイスランドではいずれも７０％を超えている。そしてアメリカでも６０％を超えている。日本より大学進学率が低い国は、発展途上国やドイツ・フランスなどの国々しかないのです。日本は一部の大学だけが受験倍率を確保しその他の大学はやせ衰えている。加えて大学交付金も減らされている現状がある。したがって大学教育全体がやせ衰えていると言えます。これは高校教育にも影響が波及しており、進学校以外の高校生がＡＯ入試や少数科目入試を狙うあまり履修の幅が狭くなってきている、つまり普通教育の質が低下してきているという現状において、高校教育の底が抜ける状態となってきているということです。昭和２２年に制定された学校教育法における我国の学校制度では、高校教育の使命は高等普通教育を施すと規定されている。しかし現在の学校制度では普通教育がきちんと行われているのかといった疑問を念頭において、高大接続テストを私たちが提起することになったのであります。我国の高大接続は国際的には非常に特殊である。例えばアメリカではＡＣＴと呼ばれる共通テストがある。ヨーロッパ諸国では高校卒業資格と大学入学資格を兼ねたフランスのバカロレアやドイツのアビトゥーアが有名である。またドイツの場合はギムナジウム、フランスの場合はリセと呼ばれる高等学校を卒業すると大学入学資格が与えられます。イギリスではＧＣＥと呼ばれる年複数回行われる共通テストにおいてＡレベルで合格すると大学入学資格が与えられることになっています。日本では高校卒業資格は校長によって与えられ、大学入学資格が生ずる。このような仕組みは世界では稀なのです。すなわち教育上の高大接続を保証する共通テストが無いのです。もっぱら大学が個別に実施する学力試験が教育上の学力把握を担い、学力判定はその選抜機能に依存してきました。なぜこのような制度が日本に定着してきたのかを考えると、大学進学はエリート層に限られていたという現状があったわけです。それは大学進学率が３０％を下回る状態が平成６年度まで続いていたことでも明らかです。その状況は昭和５０年代に大きく変化しました。それは大学受験競争の激化であります。そこで平成３年の中教審答申「新しい持代に対応する教育の諸制度」が出されたが、それは高校進学率が９０％を超えているにもかかわらず大学進学率は３０％を下回っている現状を考えると高校教育の画一化は不合理であり、高校の多様化・高校教

育課程の弾力化・入試の多様化と評価尺度の多元化を図る必要があるということでありました。特に平成元年改訂の学習指導要領により必履修科目が劇的に減少したのは記憶に新しいと思います。これによって選択科目が増えたが、それは平成１１年の学習指導要領に繋がっています。ただ、今考えると、この平成３年の中教審答申にはなお一層学力把握機能が個別大学の入学選抜機能に依存するという落とし穴がありました。そのため高校教育が大学入試に振り回される結果となりました。加えて入試の多様化と教育課程の弾力化により高校現場の進路指導が複雑になった。このように日本型の高大接続は完全に機能不全に陥っていると言えます。結局、やせ衰える大学教育と底が抜けた高校教育が今に残っているのであります。

高大接続テストが必要な理由の４点目は【経過報告】４７ページをご覧いただきたいと思います。それは高校での基礎的教科・科目の学習と大学での一般教育が一層必要とされるということです。こんな話がある。ある法科大学院の学生になぜ殺人はいけないのかと問いただしたところ、刑法に書いてあるからという答えが返ってきたそうです。この学生との応答には重大な問題が隠されていると思います。大学における教養教育や一般教育が減少し専門教育ばかりが増えてくると、専門以外の教養が抜けてくるのです。それでは学問の本質を究めることはできない。どんな学部の学生にしろ、例えば自然科学や人文科学の総合である一般教育を充実させなければ二流の専門家をもたらすだけになるでしょう。アメリカでは大学の教養教育はしっかりしているし、ヨーロッパではリセやギムナジウム段階での普通教育は実に充実しています。例えば古典教育があり哲学教育がある。この部分が日本ではすっぽりと抜け落ちていると言わざるを得ません。これからは日本の知識基盤社会のインフラを整備していかなければならが、それは高等学校における普通教育の充実に他ならないと私は考えています。高大接続テストの導入により、それを実現しようとしているわけです。先日文部科学省初中局の教科調査官とこんなやりとりをしました。件の教科調査官はとにかく高等学校で必履修である科目について大学入試センターの入試問題で出題してくださいと言ってきた。しかし私は２つについて反論しました。１つは、平成３年の中教審答申で教育課程を弾力化すると言っており、もはや高校で普通教育を完成することはできないと文科省も認めているではないか、しかし我々は高大接続を必要としており高大接続を考えない教育課程を学習指導要領で告示する文科省の姿勢は矛盾しているということです。ですから、文科省を超えてむしろ高校関係者と大学関係者が高大接続に必要な必履修の範囲を考えていかなければならないということです。２つは、高大接続に必要な教科・科目の範囲と水準は何十年と変わっていないにもかかわらず、１０年ごとに改訂される学習指導要領によって大学入試が振り回されているということでした。こんな馬鹿な話はない。高大接続とはずっと普遍的で安定したものであるべきでだと主張してきました。このように文科省が告示する学習指導要領に共通の学力把握という機能を依存できないのであれば、高校関係者と大学関係者でその機能を作っていかなければならないのです。それは私どもが力を合わせてやっていきましょう。

さて経過報告の要点５・６・７についてひとまとめにして話をしていきます。高大接続テストとはどんなテストなのかについて話をします。一番重要なことは、今高校生に勉強

させなければならないのは基礎的な教科・科目であり普通・総合・専門に共通する科目であることも間違いありません。現在までの共通テストは集団準拠型テストでした。大学入試センター試験は基礎学力を測ると言っているけれども平均点を６０点になるよう想定している。北海道大学の試験も同様である。しかしこういう試験は、ある母集団を一定数選抜するために実施するようになっています。したがって偏差値というものがたいへん重要視されております。しかし接続テストは目標準拠型テストであり現在の高校教育の評価と同様です。２４ページを見ていただきたい。大学入試センターの国語Ⅱの問題では源氏物語や枕草子が平成９年以降出題されませんでした。これは過去に源氏物語や枕草子が出題されたことがあるため、公平性の観点から類似の出題を避けたためでした。しかしこれはおかしな話である。高校生が必ず学ぶ源氏物語や枕草子を出題できない試験であることにセンター試験の限界があると思います。そうではなく高校での教科書に掲載されるような基礎的学習の達成度を測るという目的に徹するべきなのです。また高大接続テストを複数回行うことに疑義を唱える人もいますが、現在でも高校では複数回の定期テストを実施しているのでありなんら不都合は無いのではないかと考えています。生徒に何度も負荷を与えるなと主張する方もおられるが、それであれば生徒からテストを通じて学ぶという機会を奪っているのではないかと反論したい。今までも高校の先生方は１回限りの受験で人生が振り回される国立大学入試制度でよいのだろうかという疑問を提示されておりました。イギリスでもアメリカでもテストは年複数回実施されている。自分はアイビーリーグの大学に行きたい、州立大学にいきたいという生徒は目標とするスコアを獲得するために高校２年から何回かチャレンジするといった努力をしているわけです。高等学校の現場でも高校生から見てもそれぞれの生徒に合うような目標達成水準が見えてそれを達成させるような仕組みの制度設計が必要じゃないかと思うのです。もちろん専門学科や総合学科には、そこで行われる教育内容に合った選抜を行うように大学側でも工夫していきたいと思っています。ですから高校現場でもどのような生徒を育てていくのかを先生方が一緒に考えていただきたいと切に思っております。そうでなければこれからの高大接続テストの論議も行き詰っていくでしょう。ところで進学率が高まると選抜力のある大学が少なくなってくる。アメリカでは２倍以上の受験倍率を持っている大学は１７％程度である。アメリカではスコアによる大学入学資格を測るわけで、日本のように素点形式ではない。ＡＣＴやＳＡＴはそうなっています。

経過報告の要点の８にいきます。試験文化を変えていかなければいけません。これまでの日本の試験は素点方式による古典的テスト理論に基づいています。当然ですが、母集団が変わると得点分布が変わりますし平均点も移動します。それゆえ様々な標準化のために偏差値が用いられています。偏差値による評価は母集団が変わると評価すること自体が難しいのです。アメリカで行われているＴＯＥＦＬなんかがそうですが、ＩＲＴ（項目反応理論）・標準化テストを使います。どのようなものかというと、受けている人ごとに試験問題が異なっている。違っていても絶対評価が可能な試験になっている。どこかで予備的な試験をやってそのデータを蓄積していき、本試験のときダミーの試験を入れてどのような得点分布になるのかデータを取っていきます。このデータを使って安定した問題を作成す

ることができるのです。したがって特殊な試験問題を作成する必要がなくなる。そして試験内容は教科書などに記載されているような基礎的な内容になっていきます。必然的に授業における基礎的内容が重視されることになってくるのです。高大接続テストはこのような試験にしていく計画です。

最後に経過報告の要点９・１０・１１をまとめてお話します。高大接続テストは実際にどのような内容にするのか、教科・科目の範囲をどうするのか、基礎的な学力をどのような範囲で考えていくのか、これらについて今後私たちが詰めていかなければなりません。学習指導要領任せだった高等学校教育に代わって高大接続を見据えた高等学校と大学の先生方の共同の作業となります。我々の調査研究の成果は文科省に引き取ってもらうことになるが、諸団体の代表が集まった協議会を作り高大接続テストの開発研究を行っていかなければいけなりません。ただ高大接続テストが導入されたからといって現在の高大接続が抱える問題を全て解決できるということではないということです。たとえば高校教育の改革が今後必要になります。特に七五三といった中高接続と高等学校での学習達成度の確立と高大接続を視野に入れた教育課程の開発などを行っていく必要があるでしょう。また非常に複雑な思考力や表現力を問う問題を高大接続テストに負わせるわけにはいきません。そういったものを高等学校教育でどのようにやっていくのかを考えていかねければいけないでしょう。そのためには高大連携の組織的に推進していく必要があります。全高長はＡＯ入試や推薦入試のためには高大接続テストは良いといっているがこれは本質を突いています。共通テストが導入されると安心してＡＯ入試や推薦入試ができるようになってくる。そうすると詰まらない重箱の隅を突く様な問題の出題がなくなり欧米型の選抜になる。ただしそれで済むわけではなく、難関大学では個別の試験問題を実施することになるでしょう。ただし選抜力がある大学がそんなにあるわけじゃありません。せいぜい５％程度のものだろうと予測しています。ただ、今のような暗記力だけを問うような馬鹿げた問題を出す必要はなくなります。記述式の問題を出題することができるようにもなるでしょう。それから、高大接続テストを導入していく中で我々が提起している重要な問題は４月入学制度の問題です。３月に卒業して４月に入学するほど馬鹿げた制度はないのです。これはたいへんおかしな制度である。大学の入学試験が２月から３月に行われるため高校のカリキュラムが３月まで完全に行われていないじゃありませんか。高校の最後まで授業はきちんとやるべきです。３月卒業４月入学という学年暦は選抜が入る段階から変えていくべきです。また大学の定員制度を廃止していくことも必要です。現在は文科省により休学者何名、退学何名という数により予算配分が決められてくる。これでは良くありません。予算に影響される教育制度、定員制度は変えていく必要があると思います。

長々と話しましたがこれで私の報告を終わらせていただきます。私のメールアドレスは公開しておりますので何かありましたらいつでもご連絡ください。どうもありがとうございました。